

平成二十七年二月十日発行
皇學館論叢第四十八卷第一号
抜刷

白集漢墓とその画像石

荊
木
美
行

皇學館論叢 第四十八卷第一号
平成二十七年二月十日

白集漢墓とその画像石

荊 木 美 行

□ 要 旨

白集漢墓は、江蘇省の徐州の青山泉にある墳墓で、祠堂とそれにつづく三つの墓堂の壁面や梁にはすぐれた画像石が二十四幅も刻まれている。この墳墓は後漢時代のもので、被葬者の死後の生活空間として周到な設計のもとに構築されている。また、壁面や梁に残された石刻は、墓主の生前の生活をつぶさに再現したもので、被葬者の暮らしぶりから当時の風俗・信仰などを知ることが可能である。小論では、筆者の現地調査を踏まえ、二十四幅の画像石刻を再検討するとともに、あらたに拓出した鮮明な拓本の写真を掲げた。

□ キーワード

白集漢墓 画像石 拓本 徐州 後漢

一、漢代画像石とは

画像石は、後漢（東漢）を代表する遺品の一つである。宮殿・墳墓の前の祠堂・墓室の壁・門柱などに線刻や浮き彫りでさまざまな画像を表したもので、画題は、ひろく被葬者の日常生活全般から神仙や老荘伝説・歴史的故事などにわたり、当時の生活・風俗・信仰などを知る重要な資料である。画像石を有する墳墓は山東省に多くみられ、肥城県孝里舗の祠堂山の祠堂や、嘉祥県にある武梁石室は、はやく十二世紀ごろから世に知られていた。しかし、その後、中国全土で発見が相次ぎ、山東省だけでなく、河南・山西・江蘇・陝西・四川各省にわたる分布が確認された。

ここに紹介する白集漢墓は、江蘇省の徐州の青山泉の白集にある墳墓で、祠堂とそれにつづく三つの墓室の壁面や梁にはすぐれた画像石が多数彫刻されていた。

この墳墓については、一九八五年冬に南京博物院が調査をおこない、『考古』一九八一年二期には、博物院による「徐州青山泉白集東漢画像石墓」という詳細な報告を発表している。これによれば、墳墓はすでに盗掘にあい、副葬品はほとんど残っていなかったが、遺構自体は、盗掘の際に破壊された箇所を除けば、築造当時の状態を保っていたという。画像石も経年の劣化や破損はあるものの、多くは良好な状態で保存されていた。その数は豊富で、当時の社会や風俗の研究、とりわけ、徐州地方の文化をうかがう上で貴重な情報をもたらしてくれた。

筆者は、二〇一二年二月に、現地に赴いて白集漢墓の実地調査をおこなうとともに、近年採拓された画像石の拓本を入手した。この漢墓は、「全国重点文物保护单位」として整備され、祠堂や正室はコンクリートなどによって補修され、発掘当時の面影こそないが、石刻は現在も、一部を除けばほぼ当時のまま残っている。石刻の全容は、上記の

報告書に拓本の形で掲出されているし、『徐州 漢画像石』（江蘇美術出版社、一九八五年六月）にも拓本が載せられている。ただ、前者はサイズも小さく、不鮮明である。後者は前者の欠点を補って餘りあるが、それでも、このたび筆者の入手した拓本のほうが鮮明である。熟練の拓匠の採取にかかるもので、絵柄や文様を細部まで観察することが可能である。そこで、小論では、この新出拓本を紹介するとともに、あわせて南京博物院の報告を適宜抜粋・引用し（拙訳により、原注は適宜取捨）、参考に供したい。

近年、京都大学人文科学研究所や淑徳大学書学文化センターなどが所蔵する画像石拓本のコレクションがインターネットを通じて一般に公開され、学界に共有されている。小論も、これらの資料とあわせて、今後の研究に資するところがあれば幸いである。

二、白集漢墓の概要

はじめに、報告書の記載と筆者の現地踏査によりつつ、白集漢墓の概要をしるしておく。

白集漢墓は、平地に築造された墳墓で、現在も周囲には一面の平地が広がっている。上部は現在の地表から二メートル餘の高さで、もとはかなり大きな封土に覆われていたが、長い間に雨に洗い流されて、墓室が露出したものと思われる。いま残っている土墩の範囲は、東西二四・九七メートル、南北三〇メートルである。

墓は、祠堂と墓室という二つの施設からなるが、いずれも附近で大量に産出する青石を用いて作られている。祠堂は墓室の前面にあり、後方に墓室のある構造だが、二つはほぼ同一の中軸線上に建設されている。

祠堂 祠堂は、漢時代には「享堂」「墓廬」とも呼ばれた。墓前に建てられた構築物で、子孫が被葬者を供養する

場所である。現存する構造は、表門が南向きで、間口一間で、広さ二・一九メートル、奥行き一・五メートルで（内壁を基準にして計測、以下も同じ）、上部はすでに崩壊している。室内は、碎石と砂礫土（硬く水を通さない鉱石で、建築材料として、レンガや石材のかわりに使う）を混ぜたもので地固めし、二枚の石板を横にならべて床^{フロア}としている。横木や門扉などの附属建築物は、とくに存在しない。左右両面の壁（西壁と東壁）および奥の壁（北壁）は形を整えた石板を用い、床石の上に立てている。上下の間にはスナップをかけてあり、かなり堅牢に作っている。

天井部分は、発掘当時すでに破壊されていたが、左右の切妻壁の残骸からみると、もともとは懸山式構造であつたと思われる。現存する切妻壁の高さは一・九八メートル、さらに底部と屋根を加えると、高さは二メートル以上になると思われる。

室内に溜まった泥のなかからは、杯・案・皿・匙などの陶器片が出土したが、これらはおそらく、祠堂に飾られた祭器であろう。調査員が発掘した祠堂の前の門を除くと、左右と奥の三面の壁は土中に埋もれた状態だったので、祠堂は、本来、土堆に埋もれていたと考えられる。

墓室 墓室は祠堂の後方にあつて、祠堂から八・五六メートル隔たっている。構造は前・中・後の三室にわかれ、中室には左右両耳室が附属する。墓の門は南向きで、墓室の全長は八・八五メートル。

以下、順にみていくと、まず、前室はほぼ方形で、中軸線からはやや東にずれている。東西幅二・一三メートル、南北の奥行き二・一六メートル、高さ二・九七メートル。底は三枚の石板を敷いて、上部は四層の条石を積み上げ、その幅は上にいくほど狭くなる。頂口は三・九六平方メートルで、そこに蓋をして密封している。蓋は方形で、室の頂口よりやや大きいものを使用している。東壁・西壁・南壁はいずれも石板で築かれ、北は中室に通じている。



図版Ⅰ 白集漢墓展厅



図版Ⅱ 展厅横に建つ記念碑

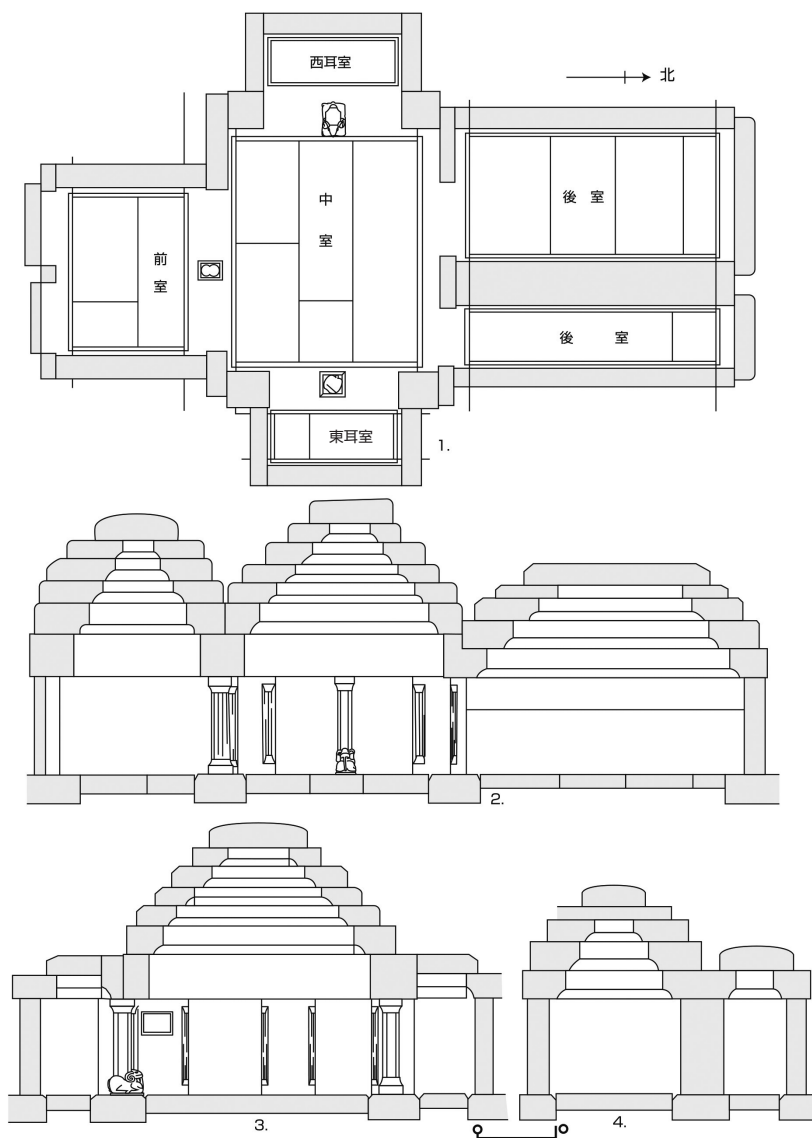
つぎに、中室は、東西幅三・九メートル、南北の奥行き二・四メートル、高さは三・一五メートルである。東西両側にそれぞれ耳室がある。東の耳室は、南北一・五〇メートル、東西〇・六〇メートルの規模で、西側の耳室は南北一・五六メートル、東西〇・五四メートル。

前室・中室・後室と、中室と二つの耳室の間はそれぞれ扉でつながっている。ただし、扉には門扉などの附属建築物は設置されていない。かなり大きい横梁の重さに耐えるために、前室と中室の間と、中室と二つの耳室の間は、それぞれ柱によつて支えられているが、三本の柱にはそれぞれ異なる点がある。中室と西の耳室の通路にある西の柱は特別な作りをしている。柱は八角菱形で、上に櫨斗が刻まれる。さらに、スナツプを横梁に嵌め込み、下部には綿羊形をした柱礎（柱や彫像の臺座）を刻み、底部にはまたスナツプが嵌め込まれている。羊はしゃがんだ姿勢で、角を巻き、鬚を垂れて、齒は心持ち口外へ出て、生き生きと描かれている。かかる石柱は、附近の茅村後漢墓でも確認されているが、白集漢墓のそれはより精密で、写実的である。

建築学の立場からみれば、こうした彫刻はデザイン性においてすぐれているだけでなく、実用的である。なお、他の二本の柱も、石羊彫刻のないことを除けば、構造は西の柱とほぼ同じである。

このほか、べつに倚柱がある。中室から各室へ通る道には、門の両側の建築物として左右対称の倚柱が存在しているが、附近で発見された漢墓の倚柱とは異なり、左右の壁に附刻したものである。あるいは用材を節約したのであろうか。形は、さきにみた石柱と同じだが、上には斗があり、下には礎がある。半身の瓜稜紋を刻んであるが、実用性はない。また、すべての石柱は中室のほうを向いている。なお、室内の調査中に、石柱の瓜稜の上に朱が塗られていることを発見したが、その痕跡はいまでもはっきりと残っている（後述参照）。

中室の床は、五枚の石板を敷き詰めており、東側の耳室の一つの石板は、盗掘者によつてこじ開けられていた。横



図版Ⅲ 墓室の構造（『考古』掲載のものを加筆・修正）

1. 墓室平面図 2. 東からみた石室断面図

3. 南からみた中室断面図 4. 南からみた後室断面図



白集漢墓とその画像石（荆木）

図版Ⅳ 石室の内部（前室から中・後室を望む）

梁の上に五層の条石を積み上げる。頂口は東西の長さは〇・七五、南北の広さ〇・四五メートルで、その上を一枚の藻井で覆っていたが、これも盗掘者によって破壊されていた。

ちなみに、室内向きの一面には柿蒂形紋飾が刻まれている。

つぎに後室だが、中室と後室の間は、門があつて直接中室から後室に通じている。

後室は長方形。なかは石板によつて東西二つの室にわけられる。

西室は南北の長さ三・二四メートル、東西の広さ一・六五メートルで、高さは二・三七メートル。頂の蓋の北部に長さ〇・六三メートル、広さ〇・三〇メートルの盗掘坑がある。

東室は西室より短くて小さい。南北の長さ三・二四メートル、東西の広さ〇・六六メートル、高さは一・六五メートルである。そして、床は一枚の敷石で、室頂はただ一層の条石を載せるだけである。

この東西の両室は、夫婦合葬の際に棺を置いたと考えられる。当時の男尊女卑の風潮から判断すると、面積が大きくて高い西室は男性墓主の棺室で、東室は面積が小さくて低いので、女性墓主の棺室とみられる。盗掘による攪乱が甚だしく、棺や白骨は発見されなかったが、土中からばらばらの状態で鉄棺釘が発見されている。

○

さて、以上が白集漢墓の構造であるが、周知のように、漢代の人々は、墓室を「室宅」「千万歳室」などと称し、死者の住居とみなしていた。その前室・後室は、すなわち「前堂」「後堂」であつて、生前の家屋になぞらえているのである。したがつて、被葬者の永続的かつ快適な生活を確保するために、さまざまな工夫が施されている。

たとえば、墓室内には水が溜まらないように、すべての墓室は前を低く、うしろを高くしている。また、中央は周より高くし、溜まった水が室外へ排除される構造に作られている。とくに、後室では、棺木が浸潤により腐蝕することを防ぐ意味があったのであろう。

このほかにも、石材を少しずつずらし積み上げ、室頂のわずかに開いた部分に小さな石材を載せる構造は、前・中・後室と両耳室すべてに共通する。かかる技法は、石材を節約するだけでなく、強度や石室内の空間の確保にもつながるのであって、ひじょうにいきとどいた設計だといえよう。

ちなみに、墓室の外の周りには積み重ねられた石条があつて、すでに露出している。西に二つ、北に四つあるが、そのなかには南北向きと東西向きの石条がある。墓室の堅固さを保つためであると思われるが、最後に封土で覆つて墓葬を整えている。

三、画像石刻について

画像石刻は全部で二十四幅あり、祠堂と墓室の前室・中室・後室、四つの部分に彫刻されている。以下、報告書などの記述を訳出しつつ、順に紹介していくが、部分的に補足したことをお断りしておく（報告書では、「第一幅」「第二幅」と順に「第二十四幅」まで画像石刻に通し番号が附されている。この番号は、報告書の図版番号とは一致せず、その排列も同じではないが、読者諸彦の便宜を考え、小論でもこれを踏襲し、両方を並記した）。

なお、各石刻のサイズは報告書と『徐州 漢画像石』（前掲）でわずかなちがいがみられるが、ここでは報告書にしたがった。また、拓本からもわかるように、上述の二十四幅の画像のほとんどには、周りは絞紋・斜各子紋・垂絹

紋・鋸歯紋の図案で飾られているが、これについては、煩瑣になるので、一々の解説では言及しない。ご了承を乞う次第である。

(1) 祠堂の画像石刻

五幅あり、以下の第一幅から第五幅までがそれにあたる。

第一幅(図六一・2) 西壁の下の礎石に刻まれた石刻。石の高さは〇・一八メートル、残っている部分の幅は

〇・七九メートル。礎石自体は、写真でもわかるように、大きく三つに割れており、石刻も右半分は破損しており、左端も欠損している。残存部分にみえるのは珍獣(珍しい動物)三匹で、すべて牙を剥き、爪を振る仕草をしている。今回あらたに拓出したという筆者所蔵の拓本では、第一・二幅の分は存在しない。かわりに筆者が祠堂内において撮影した写真を掲げておく。

第二幅(図六一・4) 東壁の下の礎石の上の石刻。石の高さは〇・一八メートル、幅は〇・七九メートル。「羽人戯龍」を描く。羽人は髻で髪もとの毛を束ね、短い上着を着て、束腰、すなわちチュニクで、両足は弓を引いたような形で、片足ずつ前後に伸びている。両手を高く掲げ、右手は龍の口に伸ばし、あたかも龍が進むのを先導しているかのようなのである。龍は一角で、口を開き、舌を出している。そして、四足は走るさまで、羽人の方向へ進んでいるかのようにみえる。さらに、一株の木があり、木の背後にも一匹の龍が描かれる。形は前者と同じだが、龍の頭は下を向いている。

第三幅 北壁の下の礎石である。すでに若干の碎けた塊になっているが、おおよそ上記の二つの石刻と同様、珍獣類の形であるという。報告書にはこの第三幅の写真や拓本だけは掲載されておらず、筆者も実物は確認していない。

第四幅（図六一・図七一）

西壁の刻石である。高さ一・五七メートル、幅一・二二メートル。後述の第五幅

（図六一・三）とともに、二十四幅の石刻のなかではもつとも大きく、かつ多様な図柄を描く逸品である。ただし、表面は粗くざらついており、石刻も多くは不鮮明である。

石刻は七つの升目に分割される。一つ目の升目には、不鮮明だが三人の人物が刻まれており、真ん中の座っているのが主人であろう。右側に侍者が二人いて、主人を伺候しているかのような姿である。侍者の後方に珍獣一頭がいる。馬のようにみえるが、翼があり、嘉禾のあいだを駆けているかのようなものである。さらにその珍獣の後方には兔が二匹いて、それぞれ杵を持ち、臼のなかの葉をつき碎くような図柄である。また、主人の左傍らに、足を大きく開いて、両手を高く上げ、踊っているような仕草の人物が二人描かれている。このほか、二頭の獣が確認できるが、形がはっきりしていない。

二つ目の升目には、真ん中に三、四人の人がいて、舞踏か、あるいは雑技を演じているかのようなのである。左側の一人は口を開けて、手を伸ばして、手の下に角形の物がみえる。伴奏しているのであろうか。ほかに十人の人物が左右に五人ずつ並ぶが、おそらく実演を観ている人々であろう。

三つ目の升目には、瑞鳥が十四羽刻まれており、嘉禾のあいだを飛び交っている。

四つ目の升目は「飛龍戲珠」を刻んでおり、龍は二、三匹ごとに一つの珠を奪い合っている様子である。升目狭しと躍動する龍の様子が活写されている。

五つ目の升目は調理の様子をあらわしている。図は井戸を中心として、その上には棚が描かれている。井戸には、釣瓶とウインチ（井戸の水を汲むのに用いる滑車）があり、左側の二人が釣瓶を引っぱって水を汲み上げている。さらに、もう一人がしゃがみこんで食べ物を盛っている。地上にはさまざまな器が並べられており、壺三つ、碗三つ、杯四つ

が確認できる。梁には肉類などがかけられている。このほか、三人の人物が竈で調理をしている。そのうちの一人が竈の前に伏して、薪を加えている。竈の上には鍋があり、熱気が外に噴出している。升目の右側には、六人の人物が刻まれている。皆直立して、胸の前で拱手しているところからすると、客人なのであろう。おそらく、これはつづく六・と七の升目の図と関聯があると思われる。

その六つ目と七つの升目だが、これらはともに賓客を迎える図である。六つ目の升目は、左側に五人の人物が刻まれており、一番前の人^が腰を屈めて客を迎えている。おそらくは主人であらう。傍らに立っている人は、背が低くて、若い感じなので、墓主の息子かも知れない。父と一緒に客を迎えにきたのであろうか。主人の後方三人はいずれも侍者であらう。右にいる七人は客人だが、リーダー格の人物は老人のようで、杖に倚りかかって歩いている。そのうしろにいる六人は皆拱手して、老人のあとに扈從している。『徐州 漢画像石』（前掲）の解説は、これを「孔子見老子」の故事をあらわしたものだとしている。

七つ目の升目は、上図のつづきである。馬車三臺が刻まれているが、前の二臺は軺車（古代の、小さくて軽い馬車）。各馬車には一人ずつ乗っていて、両方とも御者が運転している。そのうしろに輜車（古代のほろのついた車）が一臺みえるが、車内には人が見当たらない。

第五幅（図六一・三） 東壁の刻石である。高さ一・五七メートル、幅一・二〇メートル。構図と図の内容は第四幅とほぼ同じで、これも全体を七つに区分している。

一つ目の升目は、真ん中に鬻^{まゆ}で髪を束ねた人物が一人いて、端座している。これは、女主人であらう。左側に珍獣が刻んであるが、はっきりとわかるのは、瑞鳥一羽・獣一頭・亀一匹である。右側に兔が葉を搗いている。形は第四幅にみえるのと同じである。

二つ目の升目は珍鳥類で、三つ目の升目は珍獣である。珍獣のなかに「雄虺九首」という空想上の動物がみえる。この獣は九つの頭があり、身体に尾がある。山東沂南漢墓及武梁祠東闕に類例があるが、神話伝説にもとづく図案である。

四つ目の升目から七つ目までは、いずれも賓客図である。右側には三階建ての樓閣が聳え立つ（画面では、四つ目の升目から六つ目まで占めている）。最上階は、窓が閉じられた状態で、四人の人物が欄干に倚りかかって、遠くを眺めている。二階は、窓が開いて、女性三人が窓に寄りかかって、やはり遠くを眺めており、侍者が一人その傍らに控えている。その左側には軒房（窓のある小部屋）があつて、なかには六人の人物が座つていて、皆欄干に倚りかかって、下のほうを向いて観覧している。樓閣の傍らには池があり、池のなかには魚が泳いでいる。一階部分は母屋であり、扉は半分閉じていて、扉の上には鋪首が飾っている。扉の左右には一人ずつ侍者が待機している。部屋の前には主人と客があわせて七人いる。なかの五人は左の方に向いているが、おそらく主人のほうを向いているのであろう。主人は、拱手して客人への歓迎の意をあらわしている。右側の二人は部屋をほうを向いているが、これは賓客と思われる。この二人も拱手して、主人への敬意をあらわしている。

七つ目には、車馬の図が刻んである。先導の馬二頭が刻まれているが、二頭の馬は並んで歩き、騎士は矛を持つている。うしろに一臺の輶車があつて、馬車の上に一人が座り、御者は馬車の前方部に座つて運転している。輶車の後方には幌はろの附いた大車があつて、御者の頭半分が外に現れている。

(2) 墓室の画像石刻

(a) 前室 全部で六つの画像があつて、以下に掲げる第六幅から第十一幅がそれである。

第六幅(図八―上) 西壁は、高さ一・一一メートル、幅一・七五メートル。二つの升目に分かれ、上の升目には十字連環(連鎖している輪)が描かれている(今回の拓本ではこの部分は拓出されていない)。十字連環は図九―上にも描かれているが、徐州市では万寨漢墓や銅山県苗山漢墓などに類例がみえる。

下の升目は「賓客図」である。遠方からの客人を描いており、先導は二頭の馬、これにつづく二臺の輜車^{しそ}がみえる。車には一人ずつ乗る。馬車の前に御者一人が座つて、鞭を振るつて馬を駆る。亭長は、盾を持つて車の前に立ち、客を迎える。先導の人物が半分しか描かれていないのは、客を迎えにきている人物が一人ではないということを示唆している。また、輜車のうしろにも、馬の姿が半分ほど描き出されており、馬車があともつつく様子を表現しているであろう。

第七幅(図九―上) 東壁は、高さ一・一二メートル、幅一・八〇メートル。第六幅と対になっており、そのつづきである。こちら全体を二つの升目に分割し、上の升目は十字連環を描き(今回の拓本ではこの部分も省略)、下の升目には三臺の馬車を刻む。一番前の車は輜車である。輜車の構造はなかなか精巧で、ボックスの両側に方眼紋の飾り窓がある。おそらく、当時の高級役人が利用したタイプの車であろう。馬車のうしろには一人の侍者が随行している。輜車のうしろには二臺の輜車があり、一人ずつ乗車している。車の前に座っている御者は、馬を駆つて前進させる。一臺目の輜車のうしろにも一人の侍者が徒^かで随っている。なお、最後の部分には「械斗図(武器を持つて集団で戦う)」が刻まれている。三人が描かれ、二人は武器を持つて刺し合う様子で、右側の一人が戟を握つて相手を刺し、左側の人^{ひと}は両手で短い兵器を支えを持つている(左手は短い剣を持ち、右手は鉤兵である)。戟を持つている人の背後にさらに一人が

立ち、長い剣を帯びている。械斗に参加するのを待っているかのである。

第八幅(図八一中) 南横梁刻石であり、高さ〇・四四メートル、幅一・五二メートル。これは「賓客図」であり、左側には亭長一人が石刻される。彼は盾を胸の前に持って、腰に剣をかけ、身体を前へ屈め、客を迎えているかのような姿勢である。亭長の前に二人の兵士が立ち、手に長い簪へぎを持っている。『史記』孟柯列伝には「是以驪子重于齊、(中略)如燕、昭王擁簪先驅」とあり、司馬貞の『索隱』に「簪、帚也。謂之為掃地、以衣袂擁帚而却行、恐埃之及長者、所以為敬也。(簪というのはほうきである。掃除をする意味であり、ちりを客の服につかないように掃除をして、尊敬の意を表す)」とある。古代の習俗では、大切な賓客を迎えるために、あらかじめ箒で掃除をし、尊敬の意を示す。漢代の画像のなかにも、この習俗を描写したものが数多く存在する。この図も、全員が簪を持って直立し、簪の柄を下に向けている。道路をまえもって掃除し、訪れる客を謹んで待っている様子をあらわしているのであろう。右側には賓客八人が、列になって進んでゆく様子が刻まれているが、拱手をしているのは、迎えにくる人への敬意を示しているのである。

第九幅(図九一下) 北横梁の石刻で、高さ〇・四八メートル、幅一・七一メートル。この画像は、あるいは前図の続きかも知れない。左側にみえる六人は賓客の一部であると考えられる。右から左へと移動しており、一番前の人ばかりめて小柄で、おそらくは子供であろう。賓客のうしろにいる四人は、ことごとく右を向き、そのなかに三人が跪ひざまづいて俯うつむいている。また、一人は前に立ち、来る客を拱手して迎えているので、この人物が主人であろう。彼は別の列の賓客四人の到着を待っている。この列の賓客のなかで、一番前の人は身体を前へかがめ、主人へ向かって拱手して答礼している。三番目の人は腰に長剣を佩いており、賓客のなかで唯一の武官である。最後(図の右端の部分)は「械斗図」である。二人はそれぞれ短い刀を持って刺し合い、傍らの一人が応援している。械斗は廟の前でおこなう。廟の門は閉まっているが、戸の隙間があらわになっている。

第十幅（図九一中） 東横梁の刻石であり、高さ〇・四二メートル、幅一・四九メートル。三組のまったく関係のない内容が刻まれ、各組は樹木によって隔てられている。

右側の一組は「舞楽図」であり、一人は座って古琴を膝の上に置き、三弦琴を弾いている。真ん中の人は長い袖の舞衣を着て束腰し、やや膝を曲げている。その顔は琴を弾いている人のほうを向いており、長い袖が踊りにあわせてひらひらと舞う様子が描写されている。ほかの五人は、琴を弾いている人と踊り子の周囲に立って、全員が両手を胸の前で合わせ、舞楽のために伴奏している。

真ん中の一組は「羽人戯虎図」である。虎は口を大きく開き、尾を立てている。四足を躍動させ、勢いよく羽人に迫っている。羽人は腰が細く、レオタードを履いている。両肩に鳥の毛を羽織って、両手を高くあげ、左手は虎の口に伸び、虎を誘う様子である。

左側の一組には、三人の人物が刻まれる。前の二人は対峙して座り、背後には長剣がみえる。各人は手を伸ばし議論をしているかのようで、側に立っている人は両手を前へ伸ばしあたかも仲裁しているかのようである。あるいはなんらかの歴史上の故事をあらわした図かも知れない。

第十一幅（図八一下） 西横梁の刻石で、高さ〇・四一メートル、幅一・三二メートル。珍獣図である。龍は九頭があつて、いずれも牙を剥いて、鋭い爪を立て、高く飛び上がっているような姿をしている。

（b）中室 全部で十一幅あり、以下の第十二幅から第二十二幅までがそれにあたる。

第十二幅（図十一一） 南壁の刻石。高さ一・一三メートル、幅〇・六一メートル。左右の両部分に分かれ、さらに右の部分は上下四つの升目に分割されている。

一つ目の升目には、一株の金のなる木が刻まれる。たくさんの実が実っている。一人の人物が木の下で折っているようなポーズをとり、反対側には一羽の瑞鳥が飛翔する。

二つ目の升目には珍獣が刻まれる。二頭いて、一頭は人間の頭と虎の身体を合わせたもので、もう一頭は長い首で、鬚があり、姿は龍に似ているが、四足を有する。そして、瑞鳥が二頭の獣のほうへ飛ぶという構図である。

三つ目は「調琴行楽図」。三人が並んで座っている場面が刻まれている。左側の人は琴を弾く。他の二人はその人に向かって合掌し、演奏に合わせて、歌を歌っているかのようなようである。

なお、四つ目は、空欄のままである。

つぎに、左部分は上下三つの升目に分割される。一つ目の升目は、上の部分が龍一匹と一羽の瑞鳥を石刻する。下の部分には獣の頭が刻んであって、牙を剥き爪を振るっている。口の下に一つの宝珠があり、獣は口を開けて、宝珠を飲み込んでいるようにみえる。

二つ目の升目には二人の人物がいて、ともに山形の帽子を被っている。右側の人は両手で長い柄の建鼓をもっているが、その鼓の上には装飾が施されている。左の人物は長笛をもち、それを吹いている。

三つ目の升目には、一人の人物がみえる。弩を踏まえて、両手に力を入れて弓弦を引っ張る、いわゆる「蹶張図」である。かつて銅山県の洪楼でよく似た図案が発見されている。『史記』張丞相列伝には「申屠嘉曾以材官蹶張（申屠嘉は人名である、劉邦の干将の一人。材官とは、軍隊で兵器を作る官員である。申屠嘉は兵器を作る人を強弩を踏む人に譬えている）如淳曰（材官之多力、能脚踏強弩張之、故曰蹶張。律有蹶張士）（如淳曰く、ほとんどの兵器を作る人は力士であり、弩を踏まえ、弓弦を引っ張れる。だから、こういう人は蹶張とも呼ばれ、律には強弩を踏む士兵のことがみえる）」とある。

第十三幅（図十一—1） 東壁（南）の刻石。高さ一・〇〇メートル、幅〇・二九メートル。上下二つの升目に分

割される。上の升目には嘉禾が一株刻まれ、五羽の瑞鳥がその嘉禾の周りを飛翔する。下の升目にも嘉禾一株が刻まれ、樹木には円形の馬槽がかけられ、その下に馬一頭が繋がれている。また、木の上には一羽の瑞鳥が休息している。

第十四幅（図十一―2） 西壁（南）の刻石で、高さ一・〇〇メートル、幅〇・二八メートル。上下二つの升目に分割される。上の升目はさらに三つの部分から構成される。上段には長い首をもつ珍獣がいるが、その尾は彎曲している。中段に二羽の瑞鳥が排され、下段には鋪首銜環が刻まれている。下の升目には遊徼（遊徼は秦時代に設置された官名。主な役は安全を守って、防犯に努める）一人が刻まれている。

第十五幅（図十一―3） 東壁（北）の刻石で、高さ一・〇二メートル、幅〇・三〇メートル。上下二つの升目に分割される。

上の升目に金鳥（古代、太陽には三本足の鳥が住むといわれたことから、太陽の別称）が刻まれるが、これは太陽を象徴している。金鳥は円形をしており、両翼を拡げる構図で、二羽の瑞鳥がこの金鳥に向かって飛んでいる。金鳥は漢時代によくみられる図案の一つで、長沙馬王堆一号前漢墓で発見された帛画だけではなく、江蘇省の盱眙東陽前漢木椁墓の木彫図にも同じ内容のものがある。さらに、徐州附近の崗子後漢画像石にも類例がある。いずれも古代の神話伝説にもとづく。外見はおおよそ二種類あるが、一つは円形の姿をした金鳥。今回発見されたのもそのタイプだが、この図の金鳥には三つの頭があつて、ほかの絵と異なる。なお、金鳥の下に一頭の珍獣があり、長い首で、四本の足と尾を有する。下の升目には、部屋一軒が刻まれている。部屋のなかには二人の人物が姿勢正しく座る。その前には机があり、机のそばに酒樽・杓子がある。酒を飲んで、楽しんでいるかのようにである。

第十六幅（図十一―4） 西壁（北）の刻石で、高さ一・〇〇メートル、幅〇・三二メートル。第十五幅の画像の位置と対になっている。これも上下二つの升目に分割される。上の升目には女媧像が刻まれている。女媧は人の頭と

蛇の体からなっていて、両手は円形の杯を高く上げ、月を象徴している。右側の下に三羽の瑞鳥がいて、みな月の方を向いている。下の升目には兵器棚が刻まれているが、これは武庫を象徴している。棚の上にさまざまな兵器を陳列していて、戟三・矛二・剣一が確認できる。

第十七幅(図十一-5) 北壁(東)の刻石で、高さ一・〇五メートル、幅〇・四二メートル。三つの升目に分割される。

一つ目には珍獣二頭が刻まれている。

二つ目には一棟の家屋が刻まれ、階上の窓は半分開かれ、一人の女性が顔を出して外を眺めている。一階の扉は開かれており、二人の男性が地べたに座っている。二人の間には机があり、その上にさまざまな器が置かれている。さらに、机の側には酒樽があり、酒樽のなかに杓子の柄がみえる。二人は飲酒し楽しんでいるのであろう。

三つ目は、二つ目の構図に似ており、賓客と主人の酒席を描く。主人は左側に座り、斜頂単梁の帽子をかぶって、いっぽうの手を前へ伸ばし、客に酒を勧めているかのようなのである。もういっぽうの手は杓子の柄を持ち、酒樽から酒を取り出す姿をあらわしている。酒樽のそばには大耳杯・皿が各一つあり、皿のなかには四つの小耳杯が載る。主人の後方には侍者二人がいて、一人は簪をもち、もう一人は扇を持って主人に侍_{はたら}っている。客は右側に座り、服装は主人と同じである。ただし、拱手をしていて、主人への感謝の意を表しているかのようにみえる。

第十八幅(図十一-2) 北壁(西)の刻石で、高さ一・一四メートル、幅〇・五八メートル。二つの升目に分割され、上部には連子窓が刻まれる。窓の幅は〇・五〇メートル、高さは〇・三〇メートルである。下部は賓客と主人の酒席の図である。一棟の家屋が刻まれ、階上の窓は半分開かれ、そこから一人の女性が顔を出して外を眺めている。一階の母屋には客と主人が刻まれている。左側に主人がいて、手を伸ばし客に酒を勧めている。右側の客人は、胸の前で

合掌して主人への謝意をあらわしている。中央に酒樽と机があり、酒樽のなかに杓子があり、机の上には器がみえる。主人の後方には楽団が控え、酒席を盛り上げるために演奏している。楽団は全部で四人、一人は琴を調整し、残る三人は胸の前で合掌して、伴奏しているようにみえる。屋根の周りに四羽の瑞鳥が休息しているが、これは吉祥の意をあらわしたものであろう。

第十九幅（図十二―3） 北横梁の刻石で、高さ〇・四二メートル、幅二・五七メートル。全部で十頭の珍獣が刻まれる。左から順に白虎をはじめとして、雄虺九首が存する（九つの首の彫刻法は独特で、一番大きな首の上に八つの首が生えているようにみえる）。さらに、青龍二・人頭の獣一、またつぎに青龍一・獣一（獣は二人の頭で、そのうえ、尾上にも三人首がある）、ついで青龍が描かれ、最後に「青龍奪珠」で終わっている。

第二十幅（図十二―1） 東横梁の刻石で、高さ〇・四二メートル、幅二・二二メートル。珍獣十頭が刻まれるが、内訳は青龍八・瑞鳥二。

第二十一幅（図十二―2） 西横梁の刻石で、高さ〇・四一メートル、幅二・二二メートル。珍獣十頭が刻まれるが、内訳は青龍五・瑞鳥五。

第二十二幅（図十二―4） 南横梁の刻石で、高さ〇・四二メートル、幅二・二八メートル。画法は上記の三幅とちがって、柱を中心にして、柱のうえには櫺斗が、下には柱礎がある。柱の左に奇禽・珍獣が刻まれるが、内訳は鳳凰三・瑞鳥五・青龍一。また、右側には鳳凰一羽・瑞鳥六羽・亀一匹・鹿一匹・白虎一頭・馬二頭が石刻される。

(c) 後室

二幅の画像があり、第二十三・二十四幅の二つがそれである。

第二十三幅(図十三―左) 西室(男棺室。これについては後述参照) 後壁の石刻で、高さ一・四五メートル、幅〇九五メー

トル。左右二つの部分に分割される。左側はさらに上下三つの升目にわかれ、上に瑞鳥^{ひつが}一番いが刻まれ、首を交叉し、

食べ物をついつているかのようにみえる。中間部分には鋪首銜環が刻まれ、鋪首の両側にはやはり鳳凰が一番いみえ

る。下部には一番いの鳳凰が魚をついつている絵が刻まれている。なお、鋪首銜環は徐州市の漢墓に多く類別があ

る。『徐州 漢画像石』(前掲)に掲げられた銅山県収集集散在画像石のうち、図一九七(銅山柳泉)などと同じものである。

右側も上下三つの升目に分割され、上部には鳳凰二羽が刻まれる。中間部分には鋪首銜環(双連環)が刻まれ、両側に鳳凰が一番い、両角に魚一組が刻まれている。下部にも鳳凰一番いが刻まれ、三匹の魚をついつている。

第二十四幅(図十三―右) 東室(女棺室。後述参照) 後壁の石刻で、高さ一・〇五メートル、幅〇・六〇メートル。

三つの升目に分割される。上部には二羽の雀が刻まれ、首を交叉している。中間部分には、やはり鋪首銜環が刻まれている。下部には武士が獣と戦っている図柄があり、武士は長い矛で獣を刺している。

(3) 小括

以上、個別の画像についてその詳細をしるしてきたが、ここで、全体にかかわることをのべてまとめにかえたい。

さきに、白集漢墓の石室自体が、死者の生活空間として周到な設計のもとに構築されていることをのべたが、同様のことは祠堂や石室に刻まれた画像石刻についても指摘できる。すなわち、二十四幅の画像石刻を通覧すると、それらが有機的に各室に設置され、墓主の生前生活をつぶさに再現しているのが、よくわかるのである。

たとえば、祠堂は、その石刻によつて、墓主の贅沢な生活ぶりや地位がわかるとともに、不老長寿を得て永久につづく栄華を極めるという空想の内容までもが表現されている。そして、絶えることのない客がお参りに行く様子を、祠堂の左右と後壁に刻むことによつて、供養の場である祠堂の本来の意味も示唆している。

つぎに、前室、すなわち「前堂」は被葬者の住宅の門庭をあらわしている。ここには「車水馬龍」や「門庭若市（訪れる人が多くにぎわっている）」などの賓客を迎えるシーンが刻まれている。つづく中室、すなわち「明堂」は、家屋の母屋を象徴し、奇禽・珍獣や嘉禾などの瑞祥を除くと、賓主の宴が刻まれ、そこには歌舞音曲までも配備されている。また、中室から両耳室へ行く玄関口には武庫（武器棚）が刻まれ、中室から後室に行く玄関口には連子窓があるが、いずれも墓主の生前の住宅をイメージして設計したものと考えられる（耳室、すなわち休憩室は、「藏閣」とも称し、兵器（武器）と車輿（車庫）を預けるところなので、石刻はない）。最後の後室、すなわち「後堂（後寝）」は、棺具を安置するところだが、これはいうまでもなく寢室をイメージしている。後壁に双頭鳳凰が首を交わす様子を描き、夫婦の仲睦まじい様子を表現しているが、それ以外は鋪首銜環と獣と戦う武士像だけでほとんど石刻を施していない。このあたりに、設計者の配慮がみとれるのである。

発掘調査では、すべての画像石刻をかなり丹念に観察したというが、そうした調査によつて、墓室を積み上げるすべての石材は、墓室の内側に向かって平滑に整え、彫刻する石の面には墨糸で画像の輪郭（一部が現存）を描いているという。そして、ナイフで要らない部分を削除し、さらに細部を彫刻し、最後に画像に関するところに朱色で着色しているという。まさに、絵画・彫刻・配色の三者が一体となっており、漢代を象徴する藝術というに相応しい。

四、白集漢墓の築造年代

画像石そのものについての解説は以上に尽きるが、報告書の内容は、さらに進んで白集漢墓の築造年代や被葬者の身分の推定にまで及んでいる。そこで、以下は、報告書が指摘した点をかんとんにまとめておく。

副葬品の多くは、盗掘によって持ち去られていた。また、画像石には墳墓の築造時代を推定できるような文字も刻まれていなかった。築造年代は、墓の構造・画像の内容や、わずかに発見された銅貨などから推定するほかない。まず、墓の構造についていうと、白集漢墓は徐州地方における典型的な漢墓の一つである。過去に発見された漢墓の石室は、そのほとんどが前後両室、あるいは前・中・後三つの室に分けられ、多くはさまざまな画像を有していた。それらは、いずれも石材を少しずつしながら積み上げて墓頂を形成する構造である。こうした傾向の石室が徐州地方に出現するのは前漢以後のことで、後漢の時代に広く流行し、魏晋のころには一部の例外を除けば、ほとんどおこなわれなくなったとみられている。とくに、瓜棱式石柱は、後漢時代の特徴であり、徐州附近の賈汪後漢墓でも確認されている。

ここで注目すべきは、この墓に祠堂が存する点である。祠堂が出現するのは前漢初期のことである。『漢書』叔孫通伝には「恵帝為高帝立原廟」とみえている。その後、支配階級に普及したらしく、史書には「盛飾祠堂」「而幽良人婢妾守之」「広種松柏廬捨祠堂」「施祭其下」などとするされている。しかも、腕利きの職人を使って建築させたうえで、「彫文刻画、羅列成行、杼騁技巧、委蛇有章（文字や絵を刻んで、行列に並んで、技術を発揮して、いい物を作り出す）」などという記載もみえるという（洪适『隸釈』）。

こうして、祠堂は徐々に隆盛を極めるが、山東嘉祥武梁祠や歷城孝堂山郭氏祠はその好例である。ただし、徐州地方の漢墓では、前方部に祠堂を配置することは例のないことであった。白集漢墓の祠堂は、武梁祠堂・郭氏祠堂にくらべると、規模はやや小さく、時代は少し遅れる。しかも、形式はそれ以前のものとは異なる。祠堂は地上に建てるではなく、石室とともに墓のなかに埋められている。

つぎに、画像について考えてみたい。内容から判断すると、うえにみた二十四幅の画像は二種に分類できる。

一つは、現実の生活内容を反映したもの。客と主人の宴とか、馬車で出かけるとか、歌舞音曲といった娛樂などは、漢代の絵画にしばみられる題材である。日用器（竈・釜・碗・樽・杓子・耳杯など）にしても、車の形にしても、漢代の特徴をよく示している。とりわけ、衣服などは、漢墓から発見される陶俑のそれと完全に一致する。魏晋の時代の士大夫階級は、酒と薬（五石散）を服用するゆえ、上半身を露にして、襟をかけて膝をたれ、体が豊満であるが、これとはずいぶんちがう。

いま一つは、瑞祥である。誇張した表現や空想を題材（たとえば、神話伝説上の奇禽・珍獸など）は、当時流行した道教や巫術などと密接に関係しているが、これは支配階級の提唱によって、あらゆる階層に拡がったものである。かかる画像は、山東省における紀年を有する画像石墓の情況からみると、多くは後漢順帝以後にあらわれ、後期へ進むにつれ発展していく（李発林「略談漢画像的雕刻技法及其分期」『考古』一九六五年四期）。

また、その彫刻技法についても、後漢の時代の特徴が顕著である。前漢の時代にはすべて陰線を用いて刻み、陰線の発展により凹入平面彫が導入されたが、彫り方はさわめて浅い。それが、後漢の和帝から献帝までの期間に、弧面浅浮彫に発展し、一定の立体感を備えるようになった。白集漢墓の画像石は、まさにこういう時代の産物である。

最後に、石室から発見された鑄貨についてみてみよう。室内で発見した陶器かけらと鶏の骨の遺骸を除くと、六枚

の「五銖」鑄貨が残されていたが、その形はさまざまである。そのなかには後漢の初期のものがある。それらは、たとえば「五」の字が交叉し、線が丸みを帯び、「銖」の字の金の頭の部分は三角形をしているという特徴がある。こうした特徴は、後漢の末期の剪辺五銖にもみられるものである。

以上の諸点から、報告書は、白集漢墓の具体的な築造時代を後漢末期とみているが、それはおおむね妥当な年代推定であろう。

ちなみに、南京博物院の調査では、被葬者の身分や人名を特定できるような遺物は発見されなかった。ただ、報告書は、『後漢書』輿服志の「公卿以下至県三百石長導从（中略）長安雒陽令及王国都県加前後兵車。亭長設右駢。駕両。璅弩車前伍伯。（中略）自四百石以下至二百石皆二人」という記述を引いて、「墓の画像に描かれた馬車や馬の情況について考えると、墓主の身分は四百石以下の普通の官員であろう」と推測している。

もともと、白集漢墓の画像にみえる家屋はかなり豪華なので、これが生前の被葬者の暮らしぶりをそのまま反映したものだとなると、被葬者はかなりの資産家であったと考えられる。実際、白集漢墓は、過去に徐州地方で発見された画像石墓のなかでは規模の大きいもので、その墳墓から生前の被葬者の財力をうかがうことはあながち無意味ではあるまい。

（いばらき・よしゆき 皇學館大学研究開発推進センター教授）

〔附記〕

小論は、平成二十六年度皇學館大学津田学術基金の研究成果の一部である。基金の交付にあたっては大学当局の高配をたまわった。末尾ながら、謝意を評する次第である。

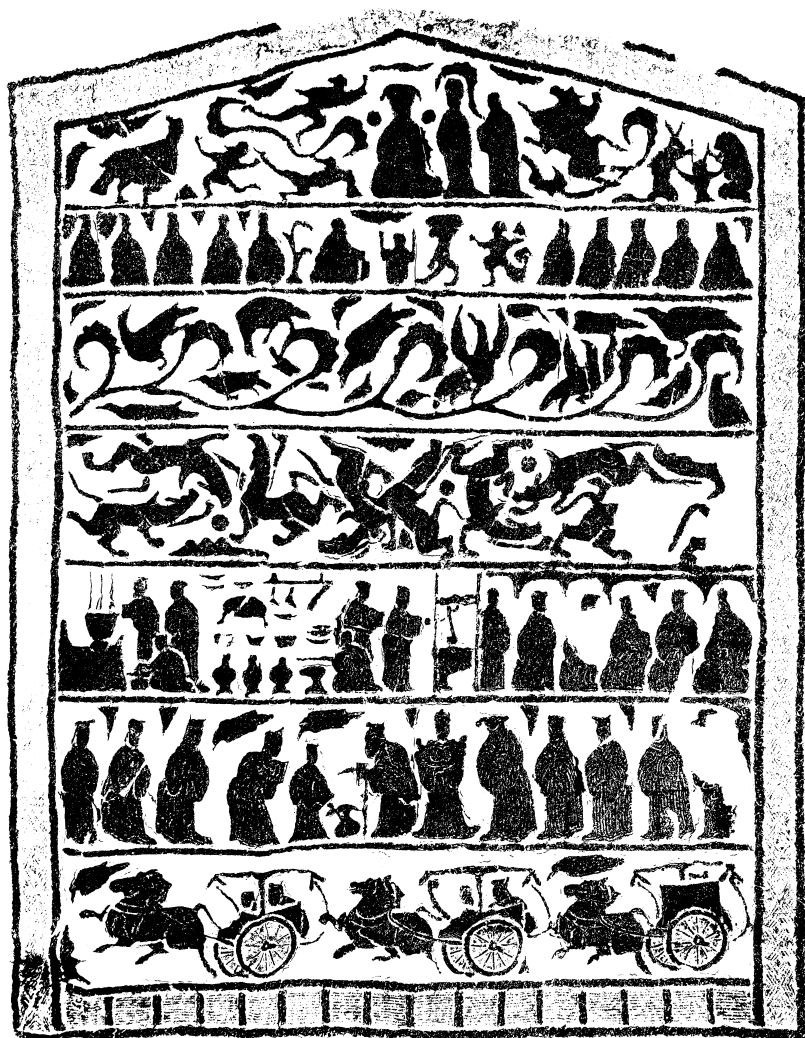
白集漢墓とその画像石（荊木）



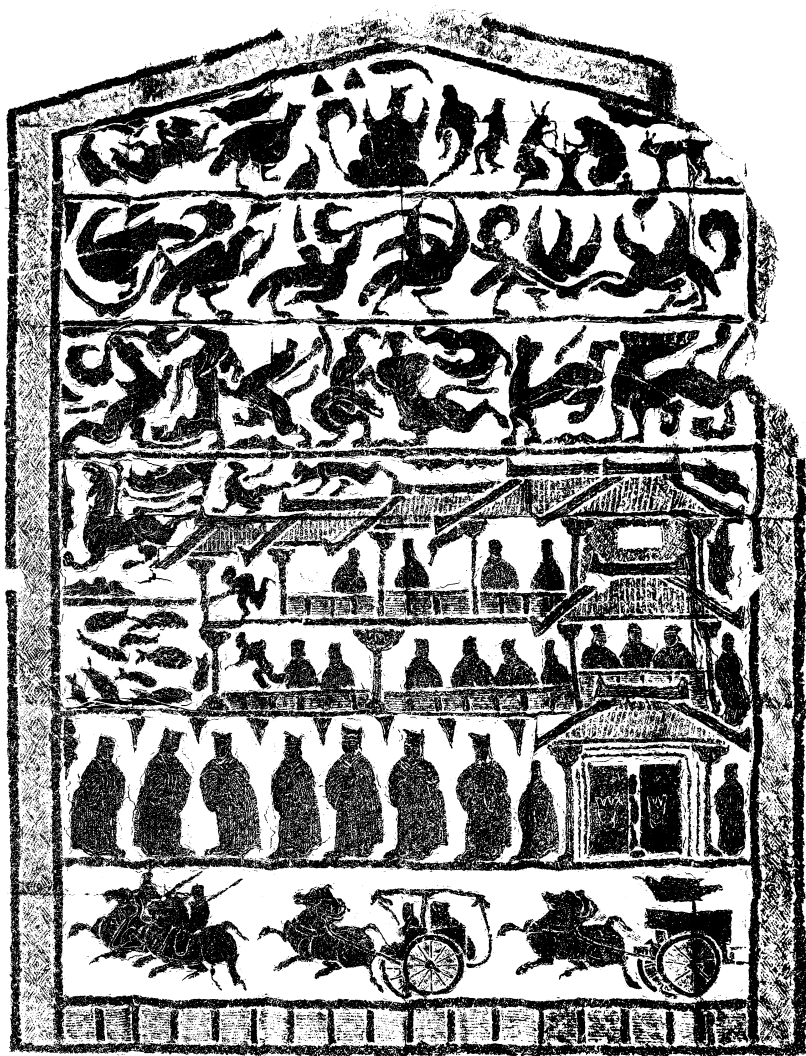
図版V 第1幅 祠堂西壁下基石（報告書図六-2）



図版VI 第2幅 祠堂東壁下基石（報告書図六-4）



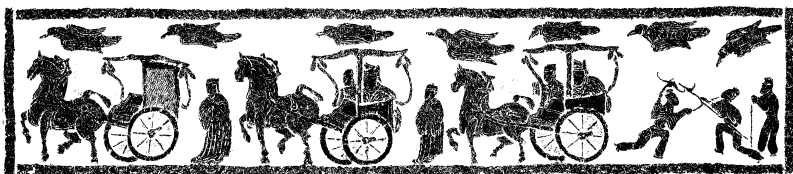
図版Ⅶ 第4幅 祠堂西壁（報告書図六-1）



图版Ⅷ 第5幅 祠堂東壁（報告書図六-3）



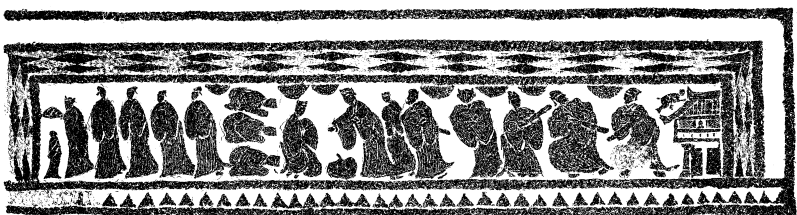
図版Ⅸ 第6幅 前堂西壁（報告書図八一上）



图版X 第7幅 前堂东壁（报告书图九—上）



図版XI 第8幅 前堂南横梁（報告書図八一中）



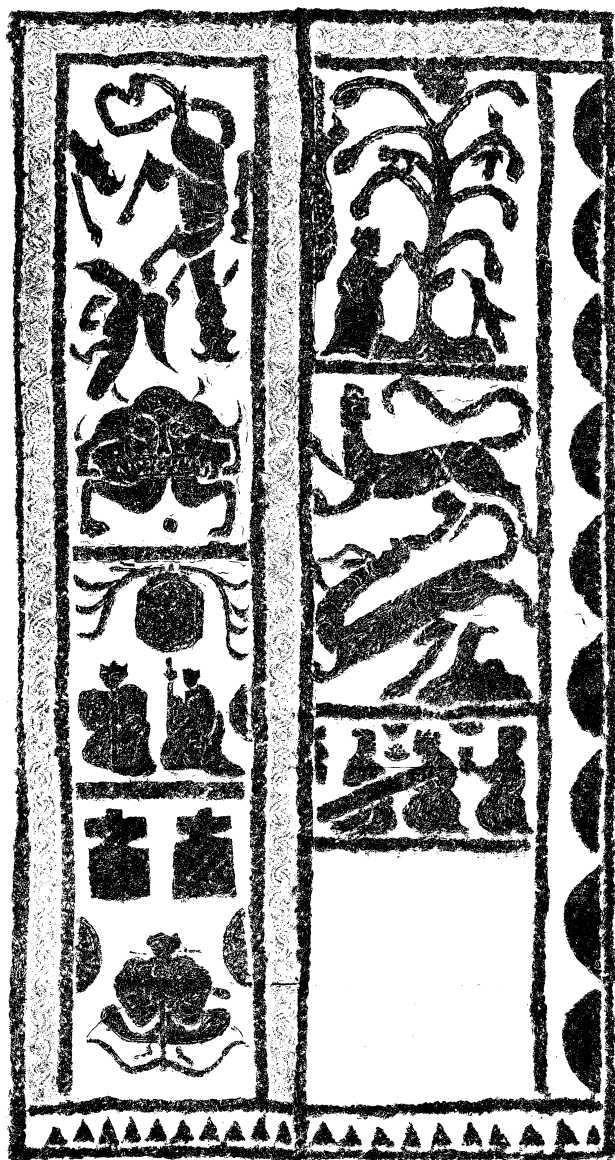
図版XII 第9幅 前堂北横梁（報告書図九一下）



図版XIII 第10幅 前堂東横梁（報告書図九一中）



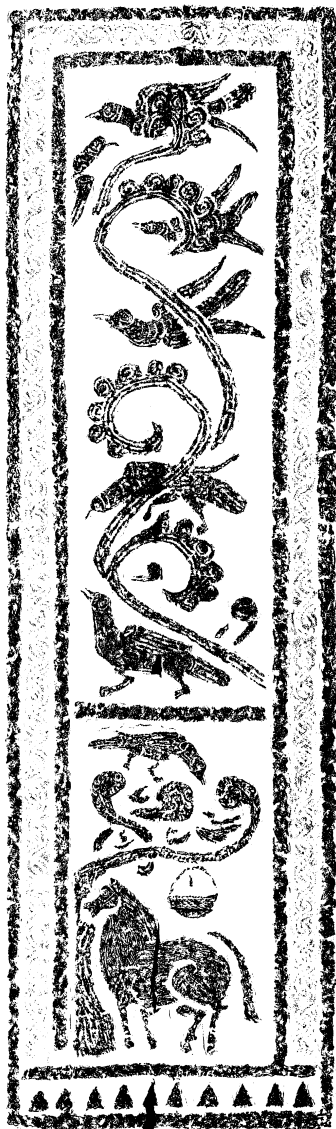
図版XIV 第11幅 前堂西横梁（報告書図八一一下）



図版 XV 第12幅 中堂南壁（報告書図十一-1）



図版XVII 第14幅 中堂西壁（南）
（報告書図十一—2）



図版XVI 第13幅 中堂東壁（南）
（報告書図十一—1）



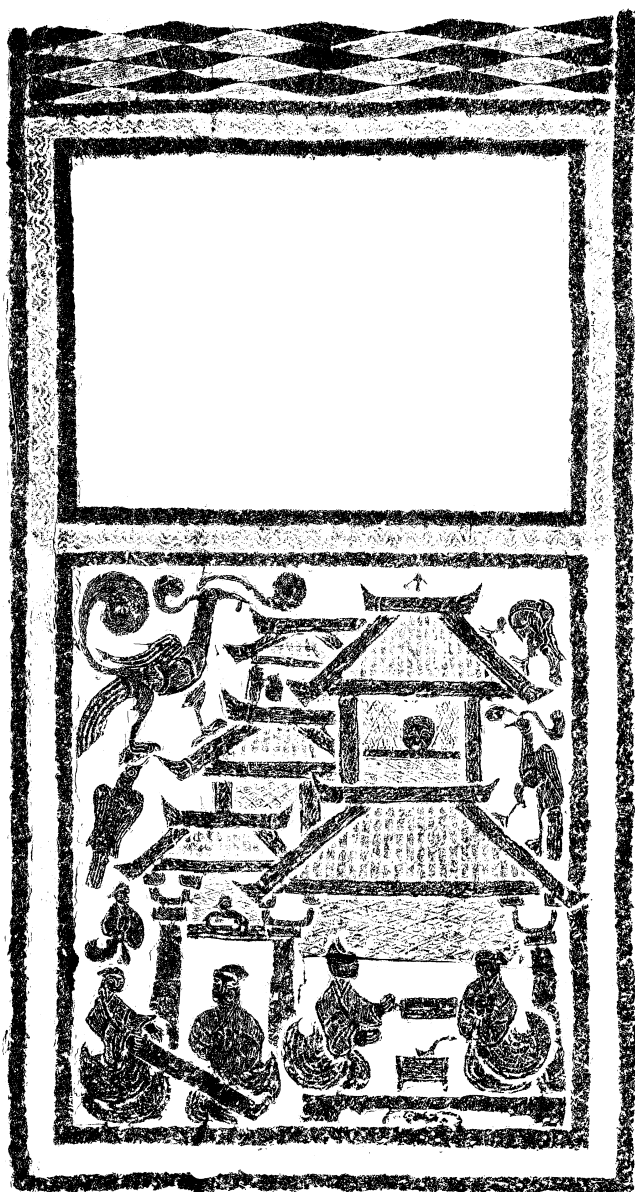
図版XIX 第16幅 中堂西壁（北）
（報告書図十一—4）



図版XVIII 第15幅 中堂東壁（北）
（報告書図十一—3）



図版XX 第17幅 中堂北壁（東）（報告書図十一—5）



図版XXI 第18幅 中堂北壁（西）（報告書図十一・2）



図版XXII 第19幅 中堂北横梁（報告書図十二-3）



図版XXIII 第20幅 中堂東横梁（報告書図十二-1）



図版XXIV 第21幅 中堂北壁（報告書図十一-2）



図版XXV 第22幅 中堂南横梁（報告書図十二-4）



図版XXVI 第23幅 後室西壁（報告書図十三一左）



図版XXVII 第24幅 後室東壁（報告書図十三一右）